

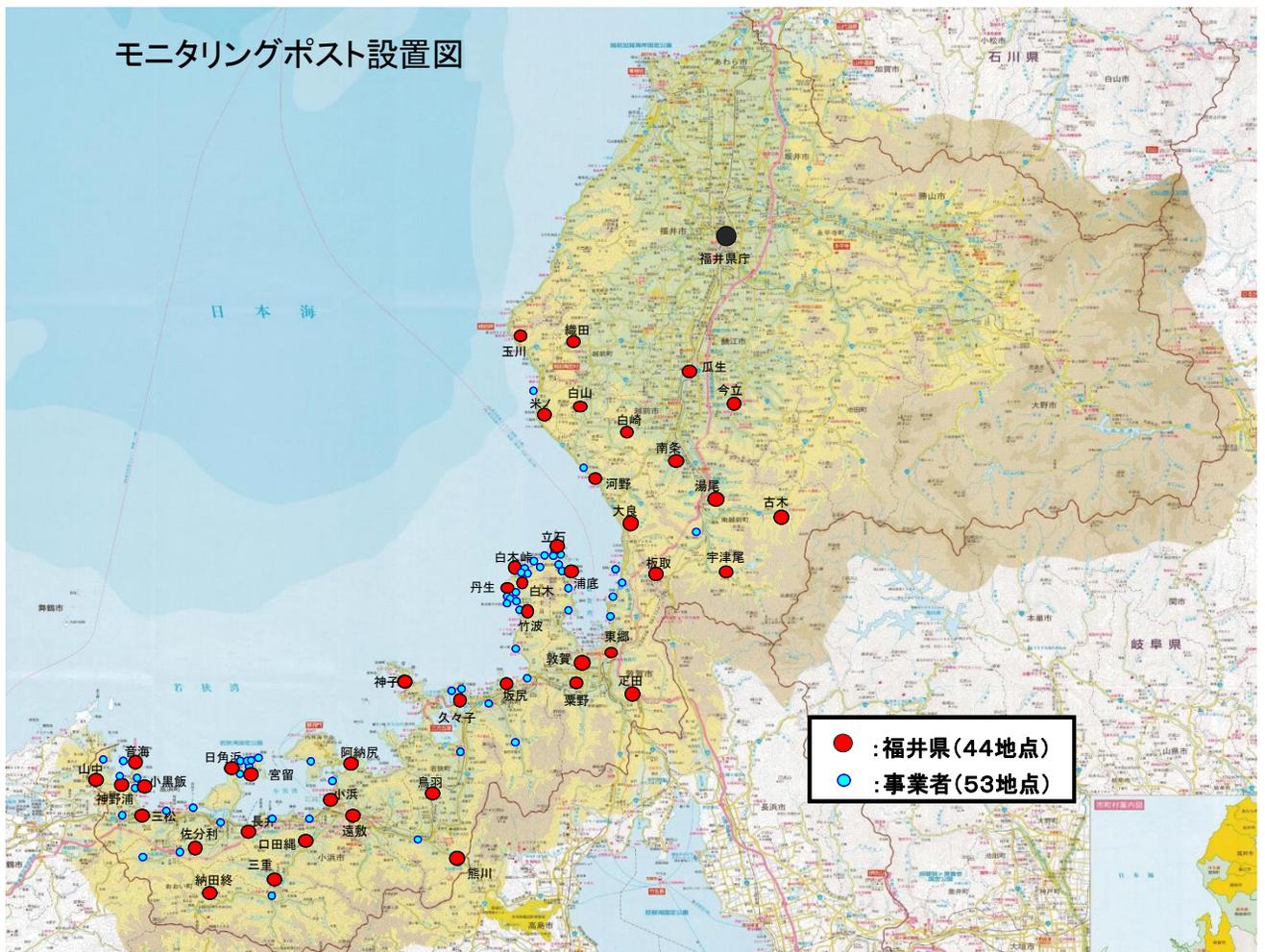
原子力発電所周辺の環境放射能調査 (平成26年度第1四半期報告書)の概要

平成26年度第1四半期(平成26年4月～6月)の調査内容

線量率連続測定		97 地点	環境 試料	核 種 分 析	海水	17 試料	
積算線量		123 地点			海底土	19 試料	
浮遊じん放射能濃度の連続測定		11 地点			海産食品	36 試料	
環境 試料	核 種 分 析	大気中ヨウ素-131	42 試料	トリチウム 分析	指標海産生物	22 試料	
		浮遊じん	48 試料		陸水	10 試料	
		陸水	10 試料		大気中水分	42 試料	
		陸土	7 試料		雨水(3ヶ月混合試料)	11 試料	
		農畜産物(原乳)	2 試料		海水	26 試料	
		指標植物(ヨモギ)	12 試料		環境試料合計		341 試料
		指標植物(松葉)	4 試料				
		降下物	33 試料				

福井県では、県・事業者合わせて97箇所での放射線量連続監視を実施している。

モニタリングポスト設置図



1 空間線量率連続測定結果

(報告書:本文は p2、連続測定結果の第1表・第2表は p32～41)

①測定地点:計97地点

敦賀・白木・美浜エリア

(敦賀地区 22地点、白木地区 7地点、美浜地区 13地点、広域監視地区17地点)

大飯・高浜エリア

(大飯地区 17地点、高浜地区 15地点、広域監視地区6地点)

②測定結果

静穏時の大気中ラドン娘核種濃度上昇による影響で、月間の平常値の範囲を超えたデータが敦賀・白木・美浜エリアの4地点で最大4時間、大飯・高浜エリアの1地点で最大2時間観測されたが、それ以外はいずれも降雨に伴う天然放射能の影響によるものであった。

結論 ⇒ 県内原子力発電所からの放射性物質の放出に起因する線量率上昇は観測されなかった。

空間線量率平常値範囲逸脱の時間およびその原因

エリア	地区 (地点数)	降雨	降雨以外	原子力発電所の影響
敦賀・白木 ・美浜	敦賀 (22)	4 ~ 20	0 ~ 4	0
	白木 (7)	13 ~ 21	0	0
	美浜 (13)	12 ~ 20	0	0
	広域監視 (17)	9 ~ 22	0 ~ 3	0
大飯・高浜	大飯 (17)	11 ~ 20	0	0
	高浜 (15)	16 ~ 25	0	0
	広域監視 (6)	5 ~ 20	0 ~ 2	0

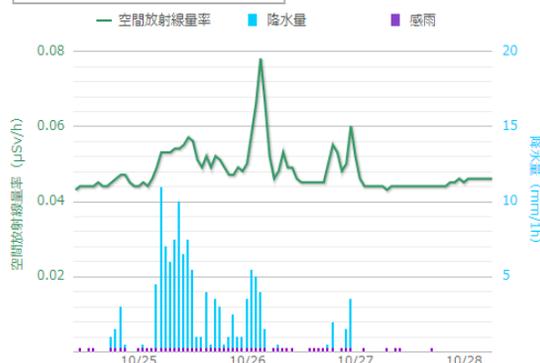
降雨による空間線量率の上昇

ラドン娘核種の微粒子は、通常、大気の大気対流により上空にまで広く分布しているが、降雨があると雨滴に付着し、地表に落ちてくるため、地上で観測される空間線量率は上昇する。

ラドン娘核種の半減期は約30分であるため、雨が降り止んだ後、2時間程度でほとんどが消滅し、空間線量率は元のレベルに戻る。



降水時の空間線量率の変化



2 積算線量測定結果

(報告書:本文はp3~5、測定結果は第3表 p47~51)

①測定地点:計123地点

敦賀・白木・美浜エリア

(敦賀地区 27地点、白木地区 14地点、美浜地区 19地点、広域監視地区5地点)

大飯・高浜エリア

(大飯地区 24地点、高浜地区 25地点、広域監視地区2地点)

比較対照エリア

(対照地区7地点)

②測定結果

県内原子力発電所の運転による線量上昇は観測されなかった。

結論⇒平常の変動幅の上限(過去5カ年平均値+3×標準偏差)を超えた地点はなく、発電所の運転による線量上昇は観測されなかった。

3 浮遊じん放射能の連続測定結果

(報告書:本文は p5、連続測定結果第4表は p52~53)

①測定地点:計11地点【県観測局のうち11地点で α 放射能、 β 放射能を連続測定】

敦賀・白木・美浜エリア

(敦賀地区 2地点、白木地区 2地点、美浜地区 2地点)

大飯・高浜エリア

(大飯地区 2地点、高浜地区 3地点)

②測定結果

- ・人工放射能検出の指標となる β/α 放射能濃度比で、平常値の範囲を超えたデータが最高5回/月観測された。
- ・同時刻の線量率でも異常はなく、いずれも統計的なバラツキによるものであった。

結論⇒いずれも天然放射能のレベルであり、県内原子力発電所からの放射性物質の放出に起因する影響は認められなかった。

浮遊じん平常値範囲逸脱の時間およびその原因

エリア	地区(地点数)	自然変動	その他	原子力発電所の影響
敦賀・白木 ・美浜	敦賀 (2)	0 ~ 5	0	0
	白木 (2)	0 ~ 2	0	0
	美浜 (2)	0 ~ 3	0	0
大飯・高浜	大飯 (2)	0 ~ 2	0	0
	高浜 (3)	0 ~ 3	0	0

4 核種分析

(報告書:本文はp5～6、測定結果は第5～16表p54～66)

①調査目的

周辺公衆の線量の推定、評価

- ・飲食物摂取による内部被ばく評価
- ・環境における放射能水準の変動傾向、蓄積状況の把握

②調査対象試料

陸上試料:大気中ヨウ素、浮遊じん、陸水、農畜産物(原乳)、陸土、
指標植物(ヨモギ、松葉)、降下物

海洋試料:海水、海底土、海産食品、指標海産生物

③調査対象核種

核分裂生成物 Cs-137、Cs-134、I-131、Ru-106、Ce-144等

腐食生成物(放射化) Co-60,58、Mn-54、Na-22等

天然放射性核種 ウラン系列、トリウム系列、K-40、
宇宙線生成核種(Be-7、Na-22)

④調査結果

- ・陸土、指標植物、海水、海底土、海産食品、および指標海産生物の一部試料から
Cs-137が検出された。

人工核種が検出された試料数

試料		地区						
		調査 試料数	敦賀地区	白木地区	美浜地区	大飯地区	高浜地区	対照地区
陸上	浮遊じん	48 試料	0	0	0	0	0	0
	陸水	10 試料	0	0	0	0	0	0
	陸土	7 試料	1	0	1	1	1	2
	農畜産物(原乳)	2 試料	/	/	0	/	/	0
	指標植物(ヨモギ)	12 試料	1	0	0	0	0	0
	指標植物(松葉)	4 試料	0	/	0	0	0	/
	降下物	33 試料	0	0	0	0	0	0
海洋	海水	17 試料	3	2	4	2	4	1
	海底土	19 試料	0	0	1	1	5	/
	海産食品	36 試料	2	3	4	3	3	2
	指標海産生物	22 試料	0	0	3	0	0	0

注: /は調査対象外

Cs-137検出数

環境試料中のセシウム-137分析結果について

(参考) 今期のセシウム-137分析結果

単位: 浮遊じん (mBq/m³)、原乳 (Bq/l)、降下物 (Bq/m²)、陸水・海水 (mBq/l)、その他 (Bq/kg)

地区 試料	敦賀		白木		美浜	
	今期	11~13年度	今期	11~13年度	今期	11~13年度
浮遊じん	—	ND~0.8	—	ND~0.7	—	ND~0.8
陸水	—	—	—	—	—	—
陸土	1.1	/ *	—	/ *	9.9	/ *
原乳	/	/	/	/	—	—
指標植物	ND~0.2	ND~0.6	—	ND~0.7	—	ND~0.6
松葉	—	ND~1.3	/	ND~1.5	—	ND~1.3
降下物	—	ND~14	—	ND~9.8	—	ND~15
海水	1.6~2.0	ND~2.2	1.5~1.7	ND~2.2	1.6~1.8	ND~3.0
海底土	—	—	—	—	ND~5.8	ND~8.2
海産食品 (魚類)	ND~0.1	ND~0.8	0.2	0.0~0.3	0.1~0.2	0.0~0.2
〃 (貝類)	—	ND	0.0	ND~0.0	—	ND~0.1
〃 (藻類)	—	ND~0.1	—	ND~0.1	—	—
指標海産生物	—	ND~0.1	—	ND~0.1	ND~0.1	ND~0.2

地区 試料	大飯		高浜		対照	
	今期	11~13年度	今期	11~13年度	今期	11~13年度
浮遊じん	—	ND~0.5	—	ND~0.5	—	ND~0.1
陸水	—	—	—	—	—	—
陸土	1.3	/ *	1.8	/ *	3.0~18	3.0~18
原乳	/	/	/	/	—	ND~0.1
指標植物	—	ND~0.6	—	ND~1.4	—	ND~0.7
松葉	—	ND~1.5	—	ND~2.4	/	ND~1.5
降下物	—	ND~24	—	ND~36	—	ND~23
海水	1.5~2.0	ND~2.5	1.9~2.5	ND~3.1	1.8	1.5~2.5
海底土	ND~0.3	ND~0.3	0.6~1.4	ND~1.8	/	/
海産食品 (魚類)	0.1~0.2	0.1~0.2	0.0~0.1	0.0~0.3	0.2~0.3	0.1~0.2
〃 (貝類)	—	ND~0.0	—	ND~0.1	—	—
〃 (藻類)	—	ND~0.0	—	—	—	—
指標海産生物	—	ND~0.0	—	ND~0.1	—	—

(注1) 実績欄の値は対象となる試料の過去3カ年全ての測定結果を地区毎に集計したものである。

(注2) —またはNDは「検出されず」を、0.0は0.05未満で検出限界値以上の測定値を示す。

11~13年度の欄で、—と記したものは検出実績が1例もないものである。

/は調査対象外を示す。

(注3) *: 採取地点変更のため過去実績なし。

検出された原因

・Cs-137については、過去の核実験フォールアウト影響が主要因と考えられ、福島第一原子力発電所事故等による影響が僅かに加わったものと考えられる。



いずれも環境安全上問題となるレベルに比べ、はるかに低い濃度であった。なお、東京電力(株)福島第一原子力発電所事故の影響は、検出頻度、検出濃度ともに減少傾向にある。

5 トリチウム分析

(報告書:本文はp9、測定結果は第17～20表 p67～71)

①調査対象試料

陸水（水道水） 10 試料、大気中水分 42 試料、雨水 11 試料、
海水 26 試料

②調査結果

・いずれも過去実績の範囲内であった。

結論⇒ 大気中水分、雨水および海水から発電所の通常放射性廃棄物管理放出に伴うトリチウムが検出されたが、環境安全上問題となるレベルと比べ、はるかに低い濃度であった。

トリチウム分析結果の概要

単位：Bq/l

地区・期間 試料	敦賀地区		白木地区		美浜地区	
	今期	過去3ヶ年実績	今期	過去3ヶ年実績	今期	過去3ヶ年実績
陸水	1.7	0.6 ~ 1.1	ND	ND ~ 1.5	0.9 ~ 1.6	0.7 ~ 1.3
大気中水分	1.1 ~ 6.5	0.6 ~ 17	1.0 ~ 2.7	0.6 ~ 4.4	1.6 ~ 3.1	1.2 ~ 6.5
雨水	1.7 ~ 2.4	1.3 ~ 3.1	1.1 ~ 1.5	0.6 ~ 1.2	1.2 ~ 1.5	0.5 ~ 3.4
海水	ND ~ 9.6	ND ~ 50	ND ~ 0.5	ND ~ 1.3	ND	ND ~ 11

地区・期間 試料	大飯地区		高浜地区		対照地区	
	今期	過去3ヶ年実績	今期	過去3ヶ年実績	今期	過去3ヶ年実績
陸水	0.7	ND ~ 1.0	0.8 ~ 1.0	ND ~ 1.1	—	ND ~ 0.6
大気中水分	1.3 ~ 3.2	1.4 ~ 9.5	3.8 ~ 11	1.7 ~ 34	ND ~ 0.8	ND ~ 1.0
雨水	1.4 ~ 1.8	1.2 ~ 4.3	1.3 ~ 2.7	0.7 ~ 7.7	0.8	ND ~ 0.9
海水	ND ~ 0.5	ND ~ 2.9	ND ~ 0.6	ND ~ 11	—	ND ~ 0.6

注：NDは検出限界未満、—は検出実績が1例もない場合、／は調査対象外

6 まとめ

①線量率連続測定および積算線量測定結果

県内発電所からの放射性物質の放出に起因する線量上昇は観測されなかった。

②浮遊じん放射能の連続測定結果

いずれも天然放射能のレベルであった。

③環境試料の放射能測定結果

- ・核実験フォールアウト等*¹の影響によるCs-137が検出されたが、環境安全上問題となるレベルに比べ、はるかに低い濃度であった。
- ・大気中水分、雨水および海水から発電所の通常の放射性廃棄物管理放出に伴うトリチウムが検出されたが、環境安全上問題となるレベル*²に比べ、はるかに低い濃度であった。

* 1: 過去の核実験フォールアウト等とは、過去の核実験フォールアウトに加え、チェルノブイリ事故や福島第一原子力発電所事故の影響を含む。

* 2: 発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値: 年間0.05ミリシーベルト